

(1～6 節) (1 節、読む) モーセは、今は一介の羊飼いになっていました。40 年前には同胞イスラエルの人々を開放しなければと熱い思いを持っていたのですが今はもう、その様な救出劇の野望(思い)は彼の中にはありません。今彼はすっかり自信を失っています。あきらめてしまっています。繰り返しますが、今彼は一介の羊飼いです。でも、そんな自分を素直に受け入れて、彼は平穩のなかに静かに日々を過ごしていました。

でも主は、待っておられました。実は彼が自負心を亡くすのを待っておられました。

モーセは、本人は気づいていないのですが、実は 40 年間、このミディアンの野で、神様からの訓練(お取り扱い)の時を持っていたのです。神様は彼が碎かれる時をを、その時を待っておられたのです。いつの世も神様によって用いられる人は、長い訓練(主のお取り扱い)の時があるようです。

——— 荒野にて ———

例えば、・・・

・ルカ 1：80 節 **バプテスマのヨハネ**。「幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日まで荒野にいた。」

・マタイ 4：1 節 **イエス様**。「・・・イエスは、悪魔の試みを受けるために、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。」 イエス様はこの後、公生涯に入られました。

・ガラテヤ 1：17 節 **パウロ**。「・・・エルサレムに上ることをせず、すぐにアラビヤに出て行き、再びダマスコに戻りました。」

荒野、砂漠の生活は、神様からの訓練を受ける生活です。荒野は常に、神のしもべを養成する教室として用いられて来ました。

ミディアンの荒野、この地は神様を教師とする神学校の教室でした。ここでの 40 年間で、やっとモーセは神様の召しに答えることの出来る器へと変えられて行きました。

そんなモーセを神様は、やがてご自分のもとへと導かれました。

さて、モーセは、イテロの羊を飼いながら神の山ホレブにやって(導かれて)来ました。

ここで、「ミディアンの祭司、しゅうとイテロの羊・・・」と書かれていますが、2：18 節の「・・・父レウエル・・・」と同一人物です。レウエルは本名、イテロは尊称です。

(2 節)「すると主の使いが、柴の茂みのただ中の、燃える炎の中で彼に現れた。彼が見ると、なんと燃えているのに柴は燃え尽きていなかった。」

(3 節)「モーセは思った。『近寄って、この大いなる光景を見よう。なぜ柴が燃え尽きないのだろう。』」

そこでモーセは近づいて、その不思議な現象を確かめようとしてしました。

この「燃える芝の意味」ですが、これは、エジプトで今まで何回も、何回も迫害されても、神様の守りによってイスラエルの民は滅びなかったこと、そしてこれから滅びることはないことを暗示する光景でした。

(4 節、読む) そこでモーセは近づいて、その奇妙な現象を確かめようとしてしました。「主は、彼が横切って見に来るのをご覧になった。」その時、モーセは神様からの呼びかけの声を聞きました。神様は「モーセ、モーセ・・・」と、声をおかけになったのです。 即座に彼は答えました「はい、ここにおります」

——— 聖なる地（神の臨在の場所） ———

(5 節)「神は仰せられた『ここに近づいてはならない。あなたの履物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。』」神様がモーセを呼んでいるのに、同じ神様がモーセに「近づいてはならない」とはどういうことでしょうか。ここで神様が語られたことは

①近づいてはならない。 ②履物を脱ぎなさい。 ③ここは聖なる地ですよ。 でした。

ここは主の臨在の場所である。主が、その所におられるということを教えることばです。

さて、礼拝する場所も同じです。主は、今朝も礼拝堂で私たちを待っておられました。主は、誰よりも早くここに來られて私たちを迎えて下さいます。ですから、礼拝堂に入る時、私たちは主の臨在の中に入ります。礼拝と集会とは違います。ですから礼拝の前は祈り、悔い改め、聖書の箇所を読み、神様にお会いする備えをすべきではないでしょうか。

(あかし 1) 私が、求道中に春日部教会に行った時のことでした。受付では、丁寧に迎えていただきましたが、会堂内は静かでした。誰もしゃべりません。何か暖かな教会の感じには感じられませんでした。冷たい教会だなと感じました。帰り際に、どなたかにそんな感想を伝えました。その方は言いました。「きっと、礼拝の前ですので、皆さん主にお会いする備えをされておられたのではないのでしょうか」この型のことばは強烈に、私の中に残っています。神様はおられるんだ、と体験しました。

(あかし 2) 私が、初めて遣わされた名古屋西教会。尾城先生に小さな車に乗せられて行きました。七宝駅の踏切を超えて、右に折れてあぜ道を進んでいくと、そこは一面葦が生えていて目の前は小さな川でした。でも横を見ると、出来たばかりの真っ白な教会が見えました。田んぼの真ん中にガラの土で埋め立てて、雑草一本も生えていないそんな 70 坪の土地の真ん中に、教会は完成していました。車から降りて、そのガラの土の庭に足を踏み入れようと

したその時、出エジプト 3:5 節のみことばが響きました。「・・・あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」実は今まで海部郡とか七宝町とか知らなかったのです。でもこの時以来この場所は、私にとって世界の中心になりました。「主は私をこの場所に導いて下さった。私は主に召されたのだ。」この確信は 18 年間変わりませんでした。

ですから、皆さんが今この会堂で礼拝を捧げておられる、それはここにおられる全員が主に召されているからです。皆さんは主に招かれてここにいるのです。その確信があればつまりくことなどありません。

——— 礼拝への心構え ———

(6 節、読む) 神様はモーセに自己紹介をしました。その時のモーセは「モーセは顔を隠した」と書かれています。聖なるお方の前で、罪に汚れている顔を上げることが出来ませんでした。確かに、「神は聖である。」ですから、神に近づこうとする者は、一切の汚れを取り去って、自らを潔くする必要があります。

・ヘブル 12:14 節「すべての人との平和を追い求め、また聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることができません。」

・第一ペテロ 1:16 節「『あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである』と書いてあるからです。」

私たちは土足のままで、神の聖所に入っていないでしょうか。

神様を礼拝する時の、カインとアベルの献げものの違いについて学びましょう。

創世記 4:1~5 節

カインは作物を持ってきました。「私はこんなに立派なものを作ったのだ」そんな彼の誇る心が見えて来ます。アベルは「羊の初子」を持ってきました。羊はキリストを象徴します。つまりアベルは罪の悔い改めの心を捧げたのです。今、モーセは深く自らの罪を意識しています。だから、聖いお方の前で、汚れた顔を上げることが出来なかったのです。神様はそんなモーセの謙遜を喜ばれました。私達も悔い改めの心を持って、聖日礼拝の時、主の前に出たいものです。

(あかし) ある教会の牧師の証です。「土曜日は聖日の備えの日です。わたしは、土曜日は必ずお風呂に入り、下着を全部取り替えます。礼拝席上献金、新札を揃えます。そして、早めに寝ます。心も体も聖くして明日の礼拝に備えます」この 52 年以上も前に聞いた先生の証を、私は今も忘れません。